

かさまのれきし

第71回

森田桜園おうえんの熱海への旅立ち

江戸時代後期、笠間藩の藩校時習館の教授、森田桜園が書き残した著作の中に「熱海紀行」があります。桜園自筆のもので、和紙に丹念に書き留めています。漢文で書かれている紀行文を和文に改めて紹介します。

予、將に熱海の勝を探り、便途鹿島三社に謁し、注子(鮎子)港を過ぎ、成田不動祠に謁し、以て江都に抵らんとす。竹中賢蔵を僕となし、戊戌年三月十八日を以て発す。

天保九年(一八三八)の春、従者一人を伴い熱海の名勝を訪ねる旅の途中、鹿島・息栖・香取の東国三社を参詣、鮎子港に寄り、成田山新勝寺を参拝したのち、江戸へ向かうこととし、旅立ちの日の様子を次のように記しています。

日出、家を発す。関口広淵・宮寺賢・菅沼正夫・小幡梅次・竹中八百治送つて六部塚に至りて別る。加藤緝熙独り随いて、粟屋為吉・佐野良三郎・樋口要・山森雄・朝比奈良恭、及び予、手越村より穴戸に至り、柏楼に投じ、離盃を諸子と酌み、送別の作有り。緝熙、横笛を吹き、落梅花を唱う。観る者市の如し。諸子相送りて橋上に至る。

予、清水寺坂を登る。諸子佇立して橋辺に在るも、言語相達せず。顧みて拝謝す。

別れの場所となった六部塚は、下市毛地内並木坂上の小高い丘の上と思われま

す。幕末の「下市毛村絵図」を見ると、常楽観音堂や松並木が描かれて「常楽並木穴戸御道」と記されています。笠間藩主の参勤交代路が、旅立ちの道にもなりました。一行は手越村を経て穴戸へ入り、

平町の通り沿いであつた柏楼に着きました。ここで送別の宴を催し、別れの盃を酌み交わしました。横笛に堪能な緝熙すなわち加藤熙が別れの曲「落梅花」を吹き始めると、見物人が大勢集まりました。桜園は門下生の熙を高く評価し、「徳が光り輝く」意味の緝熙の名で呼んでいます。当時、桜園は四十歳を過ぎ、熙は二十代後半の若者でした。熙は桜老と号し、幕末から明治前期に儒学者として活躍しました。下加賀田橋の上が、再度の別れになりました。桜園は橋を渡り、しばらく歩き坂の上に進みました。見送る人々が橋のたもとに立ち続け、旅の安全を祈る情景が目につかびます。互いに姿は確認できても、言葉を交わせないほど離れてしまいました。桜園は感謝の気持ちを込め、深々と頭を下げて府中(現石岡市)へ向かいました。

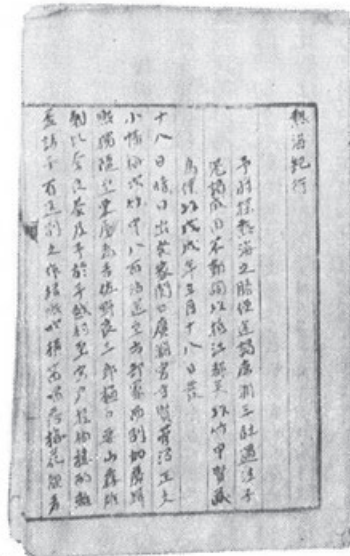
その後順調に旅を続け、江戸に立ち寄り、四月一日熱海に着きました。桜園が温泉に入ろうとすると、甲乙二つの浴槽がありました。甲の浴槽に熱い湯を貯え乙の浴槽に入り、冷めると貯えた熱い湯を汲み入れました。四日に熱海を出発、帰路、鎌倉の寺社を参詣しました。それから後江戸に立ち寄り、十九日に府中を出発、午後帰宅しました。一か月に及ぶ長旅で見聞を広めることができた反面、苦勞の多い旅であつたことが窺えます。

桜園は後年、東北地方を二回旅して、「北遊紀程」や「磐城紀行」を書き残しました。和文で記した「真壁路之記」もあります。

(市史研究員 幾浦忠男)



桜園が歩いた下加賀田の清水寺坂。坂下に阿弥陀堂や石仏・石碑が並び、北関東道の隧道を抜け坂道が続く



「熱海紀行」第一頁
(『森田桜園』田中嘉彦著より)